

令和6年 月 日

様

匿名の一市民

今、理不尽にも市当局と市議会は「東図書館」を廃止する計画を押し進めています。複眼都市として発展してきた当市の両眼（東図書館と西図書館）の一方（東図書館）を潰して片目の都市にしようとしております。

現在存在している「東図書館」をわざわざ潰すことは理に適わぬことであり、潰してしまえば、将来もずっと東舞鶴の街は図書館の無い地区になると言う事です。

このことは東舞鶴だけの問題ではなく、舞鶴全体の問題でもあると思われまます。

両眼で生活していた人が突然片方の眼を潰されたら途方に暮れるのにも似て、如何に残った方の目に高価なメガネをあてがっても失った目ほどの機能を期待することは無理です。

「東図書館」の機能を存続させ、複眼都市としての東西両舞鶴のバランスよい町づくりは、舞鶴市全体の文化度を維持し発展させる基本のように思えてなりません。

どうかそれぞれのお立場で、ご理解とご協力をお願い申し上げます次第です。

以上

## 倒錯した絵空事を描き続ける二人の〇〇氏

図書館は今や町のインフラの一部、図書館も無いような町は到底文化都市とは言えない。喩えは悪いが、図書館の無い町は、言わばトイレの無い住宅のようなもの。近くの公園にきれいで豪華な公衆便所が出来ても、便利に利用できるのはやはり家のトイレ。そして、家の水洗トイレを、わざわざ昔の汲み取り式の便所に改修する人は、おそらくいないだろう。近代的な水洗トイレ(図書館)は、トイレの完成形であるとするならば、汲み取り式便所は、旧式で発展途上の前時代的なトイレ(分館)である。しかし、当市の図書館行政は、まるで水洗式トイレを潰して汲み取り式便所に改装するかのようになり、図書館を廃止して分館に格下げしようとする頑なになっている。その上、改装した汲み取り式便所をもって、必ず住民の皆様に喜んでいただけるものとなりますなどとうそぶいている。

さらに当局は、自らの頑なな思いを実現するために、市民ワークショップを利用して、一応市民の意見を聞くゼスチャーを装っているが、市民ワークショップとは呼称は立派だが肝心の中身はお粗末極まりない代物だ。

例えば、市民への参加呼びかけは一回あたり市民10人程度で、しかも“傍聴のみ”とあった。図書館のあり方など広く市民の意見を聞く場としておきながら“傍聴のみ”の参加条件であり、些末で矮小化されたテーマを当局の意向のままになぞるように導くものであった。参加した人の感想は、ワークショップの中身は幼稚で、二度と行きたいとは思わない内容であったと聞く。そしてそのことを補うかのように、福知山公立大学の教授と、耳にしたこともない図書館協議会副会長の名を並べて権威付けを図っているつものようだが、これこそ実態は当局の権威主義(反民主主義的)の手法のそのものの表れである。

つまりワークショップで当局の信奉者を増やす意図をもって世論の誘導を謀り、ワークショップを自らの政策の隠れ蓑に利用している。更に懇談会では、当局の描いた絵空事を一方的に説明しただけで、参加の市民の意見を聞く姿勢すら見せることもなく、まるで“水俣問題のマイク切り”のように話を切り上げて、丁寧に説明したことになっている。つまりワークショップで市民の世論を都合よく養殖して、懇談会で“ガス抜き”を図る作戦という段取りで、「ちゃんとやっています感」の演出であり、羊頭狗肉の“いかさま”の状態であった。それは当局の優越的な関係を背景とした「批判は絶対に許さない、当局の言うことこそが正義」と言わんばかりの間違ったシグナルの押し付けであると言わざるを得ないものである。しかもこの失敗を内心認めるかのように、もう一度ワークショップを8月3日に計画するという、つまり効き目の無い膏藥の上に、更にもう一枚同じ膏藥を張り重ねることで効き目を期待しようとしている誤魔化しであり、懲りない面々のバカげた政策だ。これは多様な意見を重んじる民主主義を否定する態度そのものであり、民主主義を捻じ曲げる独裁的手法であり、変革されるべきものである筈である。しかもこの独裁的手法で現存する図書館を廃止するために熱心に取り組んでいるのが、ほかならぬ市の図書館政策を推進発展させる使命を担っているはずの図書館の責任者、生涯学習部長とその仲間の倒錯であるのが悲しい現実だ。

## “裸の王様”と二人の「ゾンビ」

現在、市当局が推し進めようとしている「中央図書館」構想は、多々見前市長の思い付きから始まった。当時からこの構想に深い関わりを持ち、この構想に全面的に協力し尽力していたのが外ならぬ前生涯学習部長で現副市長の福田豊明氏だ。そして現生涯学習部長の福田伸一氏はその後任として同じ多々見前市政の部長職から横滑りで現生涯学習部長へと就任した。つまり多々見前市長の有力側近が関わる事案であり、前市長の継続事業だ。

そして、先の市長選で現鳴田市長が“改革”を掲げて新市長に当選し、前市長の多々見氏を市長の座から引きずり下したのは誰もが知っている事実だ。

しかし、新市長は流行り言葉のように“改革”を謡い、改革の旗を高らかに掲げて当選はしたが、何を如何に改革するのかの中身についてはあまり自覚がなかったようだ。それは彼が市長に就任してこの方、改革らしき事案に出くわすことがなかった事実からも断定できることである。むしろ、改革すべきことを取り違えて認識し、改革すべき案件を継続すべき案件と取り違えて認識してしまったのではと思われる案件の一つが、現「中央図書館」構想であると指摘できる。

鳴田新市長はライバルに大差の票差で当選し、新市長として役所に登場し、市の老獪な幹部たちにも歓迎されて、神輿に担ぎ揚げられたまではよかったが、前市長たちが掘った“土つぼ”へ落とされた(捨てられたようなものだった)。すぐにでも“土つぼ”から這いあがって、身についた穢れと悪臭を洗い落とすべきであったが、悪臭の強烈さが癖になってすっかり匂いがお気に入りになったのか、又は同じ匂いに親近の親しみを覚えたのか、いまだに“土つぼ”に浸り満足しているかのような状態を続けている。

それは当初議会において、有力市議たちの意地悪に会って議会の運営が停滞、当局の旧来からの幹部(旧体制の幹部)の後押しを得て、何とか議会運営を回っていた事情もあるようだが、それが旧体制の温存に繋がることでもあった。

本来ならば、改革を掲げる新市長誕生により、旧市長の事業は一旦総括され、見直しされなければならなかったが、議会運営のどさくさに紛れて旧市長の事業はそのまま継続し、旧幹部を優遇して事態の穏便なる継続を図った。つまり排除すべきものが“ゾンビ”のように生き残り復活したのである。そして“ゾンビ”のように生き残った旧幹部も副市長に抜擢して(市長が抜擢したのか、市長にすり寄ったのかは知らないが)よしみを謀り、改革の一丁目一番地であったはずの旧体制を“ゾンビ”のように復活させ、新市長との蜜月を演じている。

それは新市長が軽々しく謡い掲げていた“改革”の中身については、何を改革すべきか、また、どの様に改革すべきかについての構想もなく、ただ流行り言葉のように“改革”と言う言葉の遊びをしていたにすぎないことを意味するのであろう。新市長は柔道で鍛えたスポーツ脳で、旧市長を市長の座からの引きずり下すのに成功したが、平等や公平などの文化脳ではやや未熟な“裸の王様”のようである。「東図書館」の廃止は、東西住民に不公平が生じること、更に市の文化度を後退に導くものであること等にも気付いていないのだろうか。 8月1日

## 【源泉交游】

図書館は誰のためにあるものなのか その1

何事も出発点の思いは大切です。新しく何かを決めたり行ったりするときは、決めた人の性格や思考の方向性が色濃く反映されるものです。現在進行中の「中央図書館」整備計画は、前市長の自らのレガシー思考として始まった。つまり前市長の私的な記念碑の建設という意味合いが濃厚であった。そこへ国からの支援の計画を合体させ、既存の設備を統合すれば国から補助金が交付されるという美味し話に目がくらみ、打算的な方向へと流れだした。加えて、コストカットを名目とした「株式会社舞鶴市役所論」と言うあやふやな論理が絡まって動き出した。しかしこれらの間違いの提唱者である前市長は、すでに市長選に敗れ行政の責任者の座から引き降ろされたが、その政策に深く関わっていた前市長の取り巻きの幹部は、前市長のDNAを保持したまま新市長の幹部として“ゾンビ”のように復活し活躍しだしたことで、いよいよ深みにはまり込む事態となっている。“利権好き”と“強権好き”と“〇〇〇好き”の3好きさんと噂されていた前市長の、“〇〇〇好き”は別として、“強権好き”と“利権好き”のDNAは“ゾンビの幹部”たちに確実に引き継がれて、今日の混乱に拍車をかけていると言えよう。まず怪しげな「株式会社舞鶴市役所論」から見てみよう。前市長が公言したコストカット型市政運営の一環としての政策は、図書館運営にも影響を与え、図書館の廃止・縮小への舵が切られた。しかし株式会社は利益を目的とした営利組織であり、行政サービス（図書館サービス）は福祉サービスの一環であり利益とは無縁の組織である。このように、そもそも全く性質の異なる別物をごちゃ混ぜにして考えることが大きな間違いであった。それは、「味噌も糞も一諸くた」にした理屈であって、到底常識的に受け入れられるものではないはず。なのに市長の強権で押通したところから異常なものが膨らんでしまったと言えよう。更に、市当局主催の「図書館再編についての懇談会」では、参加者のほとんどが「東図書館の分館化」に反対で「東図書館の存続を」との大合唱であったにも拘わらず、当局の福田伸一部長の市議会での報告説明では、市民の声を無視して、当局に都合の悪い部分は全く握り潰していた。つまり、民意を押し曲げ、無視することで、当局の思惑を押し通そうとしていたのである。これは「民意を歪曲捏造」していることである。しかも市議たちには事前に懇談会には参加しないよう根回ししていたとの情報もある。当局のこの独善的強権体質は民主主義にあってはならないものであり、民主主義を否定する犯罪的行為と言えるだろう。

## と【源泉交游】

### 図書館は誰のためのものなのか その2

歴史（過去）に学ばないことは、未来に対してあやふやで無責任であり、未来を見誤るものである。もともと当舞鶴市は東西地区からなる複眼都市として発展してきた経緯があることは、市民なら誰もが知っている常識です。図書館行政もこの歴史的常識を踏襲してきたことも、市民なら皆知っている事柄です。しかし、市当局は東図書館を廃止して、西図書館と合体させ、新たに「中央図書館」を整備する政策を企てている。その目的はコストカットであると説明している。しかし当局は其のことをはっきりとは市民に言わないで言葉巧みに濁してごまかしている。

しかもその誤魔化しの手口は詐欺的な手法まで取り入れて巧妙であり、うかうかすると、知らぬ間に当局の思惑に乗せられてしまいそうだ。更に当局はその行政的立場を利用して、まことしやかに宣伝し、何とか自らの主張を正当化しようと必死でいるようだが、それは当局自らの過ちを覆い隠すためのいわばゼスチャーに過ぎない。

図書館の管理運営をつかさどる市の生涯学習部長は、市民への利便を謀り、地域住民に寄り添う図書館の充実と運営のために指導力を惜しまぬ部署と思っていたが、当市の図書館行政の目指す実態は、図書館を廃止して、コストカットに尽力する部署を目指しているようだ。それでいて近隣市町から“羨ましがられる図書館を目指”すというのだから、この矛盾したマジックには驚きを感じざるばかりである。

近年「株式会社舞鶴市役所論」という政策もあって図書館でも実行されていたはずだが、どれほどの成果があったのか明らかにするとともに、合理化された金額はどこへどれだけ流用できたのかなど、その成果も市民へ是非発表してほしいものだ。

昨令和5年末から今年6年春にわたる冬の寒い期間（多分11月から3月ごろの長期にわたったと思うが）、ずっと東図書館の暖房は故障のまま放置されていて、やっと正月中ごろからファンヒーターが1台、広い図書館に設置されたただけであったが、これも「株式会社舞鶴市役所論」によるコストカットの一環だったのだろうかと思われるがどうだったのだろうか。

とにかく、図書館の整備や図書館文化サービスの発展を期すべき要職にある者が、図書館を廃止し、これからの少子高齢化対策や子育て支援への重要な拠点となるべき地域の図書館を廃止に追い込むことに努力している現状の姿は、生涯学習部の名とはあまりにも方向違いで反語的であることに気づいていないとしたら、これほどの失望はない。それは、生涯学習部長たちが如何に図書館について、無知で理解不足であることを証明していることになる、と思うのだがどうだろうか。従って、現行の図書館政策はゼロベースからの練り直しが必要であることを示唆していると思うのだが・・・どうであろうか・・・？

## 【源泉交游】

### トン・チン・カンな「図書館」整備計画

現在進行中の市の「図書館」整備構想は、関係者のトン・チン・カンで頓挫している。説明を解り易くするために単純化して記述すると、発端は①市当局の発想に起因しているが、それに追随する②市議会議員の対応、そして指導力を失ったまま停滞している③市長のだらしない存在とが三つ巴となって事態の複雑化と悪化を招いていると指摘できる。【当局の誤り】★当局の責任者は、前市長の政策の有力な推進者であり、“権威好き”と“利権好き”の性格をそのまま潜在させている。従って、市長が替わっても思考と手法には変化はなく、それどころかその要職は前任者と後任者の二代にわたって連携を強め影響力を強め継承され、ますます変わりようがなく固陋なものになっている。★当局に都合の悪い異論を防ぐため分館論から議論をはじめてはいるが、分館論へ到達した経緯は市民に伏せたまま市民は置き去りの状態である。★当局の図書館に対する理解は「空虚な概念論」であり「生の図書館」への理解度が希薄である。例えば、図書館は図書が沢山あるから図書館であるが、当局は東図書館を廃止して分館として、図書の量を8割ほど減らして、中央図書館からの定期配本で入れ替えを謀り補うと言うが、どれだけの量どれだけの頻度で定期的に入れ替え出来るというのだろうか。また配本の内容はどのように誰が決めるのか。まさか養殖の魚に餌を与えるように定期的に配本さえすれば、配本の内容如何に関わらず市民は食いつき満足すると考えているのだろうか。これでは水泳の出来ない先生に水泳を習う馬鹿らしさに似て、図書館の存在意義が理解できない当局に、理想の図書館構想を構築すること自体に無理があると言わざるを得ない。★当局は「経費節減」を理由に、東図書館の分館化を考えていると述べているが、“権威好き”と“利権好き”の前市長の下でのし上がって来た老獪な幹部たちが、一般受けするきれい事だけで、計画を立案実行している筈はない。これには知られたくない裏があるはず、人間には己の成功体験を繰り返すという人間行動学からも判断できることである。・・・など等多くの疑問を伴う事である。【議員の誤り】★6年1月12日付け『舞鶴市民新聞』に舞鶴市の五左衛門氏からの投書が掲載されていた。そこには「ある新聞記者が舞鶴から転勤する際、『舞鶴の市議は程度が低い』と告げたとある。某市議は「選挙で市民の信任を受けたのだから私の思うままに行動してもいい」と言う論法であった」と言う。現在の図書館問題についても当てはまる現実だ。地域の住民から反対の指摘を受けながら「分館ありき」の論を、議会にも諮らず突然決定事項のように顔写真付き実名で新聞折り込広告を出して市民にアピールしていた。その谷川議員はトップ当選を果たした議員でそれなりに影響力も大きく、それ以後議会でも「分館ありき」から議論が始まることとなり「東図書館の存続」を望む地域住民の声とかみ合わなくなっている。(この件については「朝三暮四」として論じている)★結局当の谷川議員は、老獪な当局の幹部の手のひらで転がされているのだが、其のことに気付くことすらできない“トン・チン・カン”ぶりである。